生きられる世界と疎外

江　原　由美子

1　疎外への視角

現代社会は疎外に充ちているといわれる。単調な機械労働、一面的な浅薄な人間関係、平板化した空間的ひろがり、一元化した時間、意味の喪失……これらは従来より多く論評され批判されてきている。

だが、この疎外を、人々の経験のあり方に定位し、その変質として把握しようとする試みは案外にして少ない。多くの疎外論は、その原因を社会構造に求めるあまり、疎外が人々の経験における事態であることを捨象し、疎外を経験の変質として問う作業を放棄するか、逆に経験に定位するあまり、その変質を把握出来ず、超歴史的普遍的事態として疎外を一般化するか、いずれかの途を選ばされているように見える。もしこのいずれの途も拒否するならば、経験の変質と社会構造変動の関連が問われねばならない。すなわち、自我のあり方、コミュニケーションの質、リアリティの質、世界の見え方等の変化を社会構造変動との関連において論じる、生きられる世界の構造転換論が必要なのだと言わねばならない。

本稿ではこの課題に対し、(a)経験における疎外を論じうる疎外への視角を呈示し、(b)分業論・生活世界の分化論を通じて成員（注１）の生きられる世界における疎外的諸経験の現出を論じることを目的としている。（本稿において生活世界とは、特定社会の全成員もしくは、一定範囲の成員に共有された知識が提供する世界像を指し、生きられる世界とは、特定社会の一成員から見た世界像を指すものとする（注２）。）

まず本節では(a)の問題から論じよう。経験における事態として疎外をとらえるならば、それは表面的には意味の喪失として把握されるであろう。我々の生きる現代社会は、休みなく動く巨大な機構として個人に現出している。個人はその中で、おのれを有能な道具か歯車にしたてあげぬ限り、自身の存在意義も存在許容も見出し得ない。白々と照射する機能的合理主義の光は、それ以外の意味や想いのただようほんの小さな窪みすら残しはしないのだ。

だが、疎外感からの回復を求める衝動が、意味への希求に収斂していくならば、逆に意味自体が神秘的な実体となってしまい、人間の存在のあり様をいびつに変形してしまう危険を免れることは出来ない。有意味性への衝動が生み出した観念が逆に他者との交流の豊かさを奪い経験を貧困化せしめたり、観念体系を維持する為にそれに反対する他者への容赦ない攻撃を是認せしめたりすることはしばしば見うけられる。言い換えれば、意味への衝動自体が逆に「意味への疎外」〔真木，1977：59〕を生み出すのである。こうした事態をも考慮に入れるならば、経験における疎外を論じる為には、有意味性への衝動自体を相対化しうる視点を持たねばならないであろう。有意味性の希求を自明のものと認めたり、意味を神秘的な実体として把握するのではなく、意味を求める人間存在そのものを逆に照らし出さねばならない。

意味を求める衝動とは何か。衝動とは本能が欠落した故に人間を把える熱情であるという。これはここにも当てはまろう。人間は本源的に<意味>を欠いている。自然に溶け込んだ、世界と密着した生のあり様を喪っている。こうした世界にはめ込まれた生のかたちを<意味>と呼んでおこう。すなわちそれは、世界への行動の態勢化（注３）が前反省的なものとして人間の身体に埋めこまれ、人間が世界と行動の態勢化においてしか出会わず、世界が直接行動を態勢化する状態、すなわち、行動と世界、身体と世界が融合した状態を指す。こうした状態にあれば、世界と人間は何の亀裂もなく、矛盾も対立も生じ得なかったろう。人間が本源的に欠いているのは、この世界との完全な調和である。

人間は<意味>を欠いた存在として世界と出会う。だからこそ人間は意味を求めざるを得ない。行動と世界、身体と世界、精神と身体、意味と行為が分化していけばいく程、一層強く人間は意味を求めざるを得ない。人間は能知一所知の未分化な状態から、行動と世界、すなわち運動的身体と世界を分化させ、かつ行動＝運動的身体を、精神と物質的身体、意味と行為に分裂させる。それは人間に無限の可能性を開いた。だが同時にそれは、人間が世界と、精神が身体と対立し相矛盾する素地をも創り出した。言語は、<世界＝身体>の指し示すままに行動するのではなく、世界を対象化し、意味によって行為を、精神によって身体を統御することを可能にする。人間は<意味>を欠く故に、開かれた可能性の中で選択し判断し意味を求め精神によって身体を統御しうるのである。だがそれは、意味＝精神が、身体を従属化させる素地でもある。意味と行為、精神と身体が分裂し、相互に対立し会ったり一方が一方を完全に従属せしめたりする時、人間は<意味>の回復を求め、意味への衝動に駆りたてられるのである。

であるならば、疎外は、その根源的な把握としては、意味の喪失ではなく、<意味>の喪失として、意味と行為、精神と身体の分裂として把握されるべきであろう。人が意味を求めるのは、意味と行為、精神と身体に亀裂が生じ相互に矛盾に陥るからである。人を駆りたてる意味への衝動は、人間が本源的に欠いている調和的世界を<回復>しようとするあこがれである。

もし、このように定義するならば、人間はついに疎外から免れ得ないのか、という問いが生じよう。ある意味ではそうである。人間は分裂的存在であることを免れ得ない。それは人間であることそれ自身である。この意味での疎外を原疎外と呼ぶことにしよう。

だが、他面では疎外は克服しうるし、又されねばならぬ事態である。なぜなら、意味と行為、精神と身体の分裂・対立は、単に言語・意識といった人間にとって普遍的条件によって起されるだけでなく、社会的分業のあり方や生活世界の分化等にも起因するのであり、こうした社会的諸要因による疎外こそ、現代社会の疎外的経験の核をなす事態だからである。これら社会的諸要因は、一個体意識内の意味と行為、精神と身体の分裂・対立を一層深め強めるのみならず、社会成員間における両者の実体的分裂・対立をまで引き起す。その時疎外は、原疎外の上に諸規定を付加し、関係性における諸局面として現象する。我々の疎外的経験を論ずる時、これこそ主要なテーマである。

本節における、抽象的・人間学的な疎外の考察は、以下に述べる社会的要因による疎外的経験を透視する視角となるべきものである。それ自体としては軛のように人間に随伴する意味と行為・精神と身体の分裂としての原疎外の定義は、その極限性を通じて逆に、社会的要因による疎外的経験

に鋭く食い込み得ると考える。

2　分業と生活世界の分化

次に(b)の問題を論じることにしよう。第1節で原疎外を社会的要因による疎外と分節したが、それだけで現代社会における疎外を記述するに不充分な事はいうまでもない。本節では、社会的要因自体の分節化と諸社会モデルの分節化を行い、現代社会における疎外的経験の記述により近づいてみることにしたい。一見迂遠の如きこうした作業を行うのは、現代社会における疎外的経験の様相は、歴史的に生じた様々な要因の複層的な現象としてしか充分把握しえないと考える為である。こうした諸要因の分節化の為に、たとえ粗雑ではあっても、生きられる世界の構造転換という視点から歴史的な諸社会を把握しなおし、問題をその問題が生じたところに投げかえす作業が必要であると考える。

まず始めに、諸概念を整理し枠組を呈示しておこう。本稿で生活世界とは、既述した如く、特定社会の全成員もしくは一定範囲の成員に共有された知識が提供する世界像を、生きられる世界とは特定社会の一成員から見た世界像を指す。

人は生活世界の内に生まれる。人は一人で生きているのではない。意味も又、一人で創出するものではない。我々の生きられる世界を形づくるいかなる意味的構成物も個我に還元しつくすことは出来ない。それは長い歴史の中で無数の無名の人々の創出した意味に多かれ少なかれ依存している。他者の生み出した知識と事物は世界に部厚く堆積し世界をおおいつくしている。

人は又生きられる世界を創出しその内に住まう。人は社会的意味を組織化し、おのれのリアリティとアイデンティティを編み上げていく。人はいかなる社会においても与えられた生活世界の中で、自らそれを一貫性あるものとして理解しようとする。たとえ社会が既に体系だてられた意味的世界を成員に与えたとしても、それを意味あるものとして読み取り得るのは、構造でも制度でもなく、一人一人の成員である。言い換えれば人は誰も自我として生きねばならない。これは単に個人の確立した近代人に関してだけあてはまるのではない。いかなる社会に生きようと人は単に受動的に形づくられるのではなく、世界の創出に参加しているのである。世界の存立は、世界を意味あるものとして読み得る自我の力に依存している。たとえその意味が他者の生み出したものであったとしてもそれはこの人間の世界を創出する力の重要性を少しも損傷しない。すなわち人は、生きられる世界を創出し、その内に住まうのである。

疎外とは、この生きられる世界における意味と行為、精神と身体の分裂という事態であることは第1節で述べた。このような分裂は、社会関係の内においては、単に一個体内での出来事にとどまらず、主体間の関係として現出する。すなわち、それは、一方において、他者の身体も自らの身体と同じく疎遠なものとして対象化し、精神＝自我に従属させようとする意志として、他方において、自らの身体の動きを統御できず、他者の命令・意志・恣意のままにされうるという事態として現出するのである。一般にこの二契機は相互反照的である。すなわち、自己の身体とともに他者の身体をも従属させようと思うものは、それとうらはらに常に、自己の身体が他者の意志のままにされうるという可能性に開かれてあり、逆に自らの身体を譲り渡した者はその心的な基盤において他者身体を

我有化しうるのだという意識を準備する。

人間は、その心性において自己身体を他有化させうる可能性を秘めている。第一に、人間は、本性において無限に社会的意味＝他者性を取り入れ得る存在である。人間は他我を取り入れ得る、いや、自我は他我より成るのである。第二に、人間は自己を疎遠なものとして把握する傾向がある。人間が自らを把握するのはその分身を通してである。前者は、人間が自らのものではない他者の意志や観念・思考によって動かされ得ること、すなわち人間が自らの身体を他者の意のままにさせ得る可能性を示し、後者は、人間が自ら創出したものを、何か他の主体に託して理解する傾向を持つこと、観念的・幻想的な主体を創出しさえすることを意味する。故に、社会成員間に顕著な分業が見られぬ時ですら、自己身体の他有化という疎外的事態は現出しうるのである。

だが逆に、他者身体の我有化という心性は、より特殊な事態として現出する。すなわちそれは、同一の共同社会に所属する成員間の共感の絆が絶ち切られなければ現出し得ない。すなわちそれは、近代的意味での個人の確立＝個体化を前提とする。同一の生活世界に内属していた者が、他者の身体を自らの恣意によって支配しうるという心性を、相互的ないし一方的に持ち得る為には、生活世界自体に何らかの変動がなければならない。すなわち、生活世界の分化・多元化という事態が必要なのである。生活世界の分化・多元化とは、(1)内容的分化・多元化 (2)共有範囲の分化・多元化という両側面を持つ。前者は、例えば、日常的な自明の知識のストックから特定の項目に関する知識が自立化し、専門的な医学的知識とか、祭礼に関する知識とかに領域的に分化し、それぞれが提供する世界像が異ってくること、後者は、そのように分化された知識による世界像が、社会成員の中の特定の範囲の人々にだけ分け持たれていくことを指すものとする。それぞれの知識領域には、固有の価値観や態度・意識のあり様等も含む。このような生活世界の分化・多元化は、成員相互の間の理解・了解可能性を減少させることによって、共感の喪失を生み、他者身体の我有化の心的基盤を生み出すと考えられる。この他者身体の我有化という心性が社会成員の一部もしくは全員に分け持たれた時、関係における疎外の一側面としての固有の自己身体の他有化が現出する。

この生活世界の分化・多元化、そしてそれを通じての疎外的事態の現出を社会構造的に基礎づけるのが分業化である。ここで分業とは簡単に、一方的ないし相互的に他者の行為に依存しつつ互いに異なる行為を為すことと定義する。一般に分業化は、生活過程の特殊化・分化を通じて、経験における差異を生み、異なる経験のつみ重ねが、異なる知識のストックとそれによる世界像の分化を生む。これが生活世界の分化・多元化を生む一要因である。本稿のテーマに関する限りで、分業を以下の如く類型化しておこう。(a)自然的分業、(b)知識の領域分化に伴う分業、(c)意味に関する分業、(d)労働過程・作業工程の細分化。

ここで、(c)、(d)に特に着眼しておこう。(c)、(d)は、上述した如く生活世界の分化に関連するだけでなくさらに、疎外的事態の現出に関し、より直接的な作用を持つ。(c)の意味に関する分業とは、意味を生産する者が他の成員と区別されて特定化されることを指す。それにたずさわる者は、他の成員の行為に関してその意味を論じ、正当性を判断し、目的を示し、他の成員の行為を規制しうる。このような分業は、一方における他者身体の我有化、他方における自己身体の他有化を直接現象させる。また、(d)の労働過程・作業工程の細分化は、行為のまとまりを破壊する事により、その労働にたず

さわる者に、自己自体の他有化と同様の経験の質を与える（注４）。

以上の論述をまとめると以下の如く言いうるだろう。すなわち、疎外とは、生きられる世界における意味と行為、精神と身体の分裂という事態のことである。これは、関係性においては、他者身体の我有化、自己身体の他有化という現象をとる。こうした関係性の現出は、成員間相互の共感の喪失をもたらすような生活世界の分化・多元化を前提とする。（つけ加えるに、生活世界の分化・多元化は、生きられる世界の非統合＝分裂に一層拍車をかけ、精神と身体、意味と行為の分裂を強めるのである。）生活世界の分化・多元化は社会構造的には主として分業化に起因する。要約すれば、(a)分業化、(b)生活世界の分化・多元化、(c)生きられる世界における精神と身体、意味と行為の分裂・非統合が、同時的に表裏一体の出来事として進行するのである。以下では分業形態の類型と生活世界の分化・多元化の関連からいくつかの社会類型モデルを構成し、第３節における生きられる世界と疎外の記述の準備とすることにする。

第一のモデルは、自然的分業のみが存在し、生活世界の分化・多元化は生じていないような社会である。自然的分業とは、(1)自然が課す条件に必然的に伴う分業（ex．乳幼児を大人が養育すること・出産）(2)自然が課す普遍的な差異（性別・年令）に従ってそれぞれ成員に平等に構成されたライフ・サイクルに伴う分業（ex．成人男子の役割）(3)協働作業における、その場限りの分業（ex．狩における追い手と射ち手）を指す（注５）。こうした社会では、偶然的な個体差を別として、同性同世代の成員間では社会的に継承された知識は特定の個体に偏在することなく平等に分け持たれているはずである（注６）。

第二のモデルは、窮極意味に関して分業が生じるが、成員間の生活世界の分化が顕著ではなく意識化されていない場合。窮極意味とは、共同体ないし個体の存立にとってもっとも肝要と意識される意味領域を指す。こうした意味領域は、しばしば、共同体の各成員の手の届く世界を超えた次元を含んでいる。こうした異次元の世界、例えば〈聖〉に、共同体全成員の願望や欲求を荷って、相対する特定の成員が選出される。だが、このモデルでは、選ばれた者（ex．祭司・指導者）と他の成員の間には、共通の目的・信念・願望が存在し、両者は共通の生活世界に生きていると意識されている。

第三のモデルは、窮極意味が特定の成員（ex．祭司や指導者）に専有され、他の成員の生活世界と彼らの生活世界が分化する場合。祭司や指導者達は彼らに付与された権威を共同体から切り離し自己自身に根拠を求めるようになる。この時共同体の他の成員は〈聖〉や窮極意味・価値に近づく権利を奪われ、祭司や指導者達に顕現された〈聖〉・意味・価値に従属する。他方祭司や指導者は共同体から自立した自己意識・目的・利害関係を持つようになり、個体化する。両者は相互に理解しえぬ世界に住まい、両者の間の共感は喪われる。

この生活世界の分化が生じた時、他者に対するむき出しの支配の意志が生じうる。支配者に転態した祭司や指導者は、自らの個的な人格を確証する為に、他の成員を無化し物財の如く扱い得る。異民族支配の場合も、同様の心性が作用していよう。

窮極意味に関して考察したことは他の領域に関しても一般化しうる。すなわち、意味の独占的専有は、他者の行為についての弁明・弁証・正当性の付与を行い得る力の保持を通じて、他者を自ら

の思いのままにしうる力を存立させ、知識の独占的専有は生活世界の分化をもたらすことにより、相異なる利害の存立と共感の喪失を成員間に生じさせる。両者は支配一被支配関係の心的基盤を創出する。

一般に個体化とは、共同体内における支配的意志の出現と、各共同体間の接触・交流における異文化との出会いを通じて現出する。近代的個人意識の出現はこの二契機の動的な連関として把握されるべきである。

第四のモデルは、知識の領域分化と専門性に基く分業が一般化し、様々な個有の知識・制度を持つ小世界に生活世界が分化する場合。これは第三のモデルが含意した支配一被支配関係の相互的一般化を意味する。異なる生活世界に属する各成員は相互に様々な文脈による専門家（＝生産者）↔素人（＝消費者）として出会う。

こうした分業は当然にも広域の商品流通を前提としており、都市的社会であることを必要とする。都市的社会は、異なる生活世界が相互に相接する機会を増大させる（注７）。この事にも、心的な共感が喪失する一因があろう。

第五のモデルは、確立された各生産単位内において、知識・技術の客観化とそれに伴う独占的専有が成立する場合。第四のモデルにおいては、知識・技術は労働行為と切り離せぬものとして、各労働主体に所属していた。だがそのような知識・技術が客観化され、誰にでもなしうるものとして定式化されると、労働主体は自らの労働の主人であることをやめ、むしろそのような知識・技術を専有し労働手段を保有する者に自らの労働力を売り渡すことになる（注８）。労働主体の自立性は喪なわれ、他方、生産手段の保有者の自由度は増大する。そこにおいてそれまで各領域・各単位ごとに統一性を保っていた生活世界は、知識・技術を独占的に専有する者の世界と、それに従わされる者の世界に引き裂かれることになる。そして各領域ごとのまとまりよりもむしろ、引き裂かれた生活世界のいずれに属するかによって、生きられる世界の様相が規定されるのである。

第六のモデルは、労働過程を分断し、細分化するような分業系の確立。ここにおいて各人は、細分化された労働過程のごく一部を担うにすぎぬ相互互換的な存在となる。従ってこうした社会では、独自の知識によって成る自立した生活世界は崩壊し、一方における客観化した知識・技術の集積と、他方における匿名的な労働力の対峙を生む（注９）。そして、各成員の周囲には、各労働過程に応じて細分化された従属的な小生活世界（＝職場世界）と、労働の場から離れた、消費的な極小的生活世界（＝私的世界）が現出するのである。

第七のモデルは、意味そのものが生産・消費の対象になることによって生ずる、意味に関する分業の新しい事態と擬似的生活世界の一般化。意味に関する分業は、このモデルにおいて完全に貫徹される。多くの成員は単に生産される意味を受動的に享受するにとどまるのである。従って、多くの成員は、直接に彼が所属する集団や形成する諸関係、又行っている労働とは無関係に、これら大量に生産され伝達され消費される意味の世界に住まうようになる。これは擬似的な生活世界（注１０）として、各成員の依拠するリアリティを形成する。

このような社会における意味を生産する労働は、それ自体細分化され断片化されているので、それ以前の社会におけるような特権性を喪っている。従って、行為と意味の相互的無関連性が全社会

的に拡大し、文化と生産（＝労働）との乖離が生じるのである。

以上の分業と生活世界の関連性の記述に基き、以下では生きられる世界と疎外の問題を論じていくことにする。

3　生きられる世界と疎外

第1節において、人間は、本源的に分裂的存在であることを免れ得ないと述べたが、それはけっして、経験のレベルでのことではない。確かに人間は身体に埋め込まれた本能による生き方を喪い、無限の可能性の中から一つの行為を選択し続けることを余儀なくされた。だが、人間は社会的な意味世界を創出することで、特定の選択肢以外を構造的に排除し、それがあたかも唯一の世界であるが如くに生きることができる。そこでは行為は意味を問うまでもなく無意識的な身体の動きとして為され、経験においては精神と身体に何の分裂も矛盾も感じずにすむのである。

第一のモデルにおいては、人々は共通の自明の知識のみに従って行為している。その生活世界は、領域分化による多元化を被ることなく生の全体性をおおい尽し、成員に、生と死や、人の生涯のあるべき姿に関して一貫した像を提供しうるだろう。各成員はその生活世界の内にのみ生き、個的自我の意味づけの努力なしに生きられる世界を統合しうるだろう。従って各成員の生きられる世界の様相は、所属する共同体の生活世界とほぼ一致している。各成員は、おのれの生きられる世界を独自な個体的なものとして意識することもないかわりに、他の成員の生きられる世界を疎遠なものとして意識することもないであろう。自分が身体的に会得している知識に従って行為しているように、他者も同様に行為していることが自明の前提なのである。現代のコミュニケーションでは、他者の想いは知り得ないという事が自明の前提となっているが、これとは正に反対である。こうした社会では各成員は自らの行為において、意味と行為、精神と身体の分裂を経験しないと同時に、関係においても疎外的経験を持たないであろうと想定しうる。

だが、このような社会でも、疎外が生じうる可能性がある事は、第2節で述べたとおりである。まず第一に、こうした分業を持つ社会では、革新が起りにくく伝統が権威を担う故に、それまでの全前世代（すなわち死者達）が創出した意味が、その内実が失なわれたとしてもなお、現世代の人々の行為を規制しがちである。この時成員はその意味を知らずして行為するということが起り得る。第二に、創出された観念的主体（＝神）が成員に超越的力として対し、成員の行為を規制する可能性が存在する。その時意味は成員から疎遠なものとして成員に経験されるのである（注 11）。

第二のモデルにおいても、分業は支配一被支配関係としては現出しない事は既に述べた。そこでは、指導者・祭司といった役割は、個的自我の表現ではなく、直接に共同性を表現するペルソナなのだ。ペルソナは個的生を越えた不死性を持ち、各成員はたまたまそのペルソナを具現、受肉するにすぎない。すなわち、各成員は、既に社会的意味の内に書き込まれているいくつかの役割の内から、一つを選んで身にまとえばよい。それによって彼の生きられる世界は一貫性を持ち、共同的な世界に生きることになる。

ここにおけるペルソナは、現代社会における「物象化された官僚制内の役割」と区別されねばならない。確かに、ペルソナも、現代社会の諸役割と同じく、個人を超越した客観的な役割であり、

個人はたまたまそれを身にまとうにすぎない。だが、それが現代社会と決定的に異なるのは、それが直接に共同性の表現であることである。その役割を身にまとう者と他の成員の間には、共通の信念・目的が存在し、両者は共感の絆で結ばれている。演劇的に言うならば、共同体成員は皆、ドラマの筋書を充分に知り尽しており、共同して一つの意味的世界を創出しているのである。これは成員の経験において後に述べる現代社会における分断された役割とは全く別の質を持っている。このモデルでは、各成員の世界は統合され、個的なアイデンティティへの衝動に駆られることはないのだ。

従って第二のモデルにおいても、第一のモデルと同じく、疎外が生じる可能性が伴うとはいえ、基本的には分業による、関係における疎外的経験は生じない。

だが、第三のモデルになると、祭司や指導者達の持つ知識は、他の成員の手の届かぬ疎遠なものに変質する。〈聖〉の代弁者・具現者としての祭司や指導者達は、絶対的な権威を持って他の成員に対し、他の成員は自らの無価値性を通じて、祭司や指導者達の栄光を際立たせる以外のものではなくなる。その時、祭司や指導者達は共同体的な規範や信念から自己を引き離し、自己の個体性の確認を求めるようになる（注12）。他の成員との間の共感の絆は断ち切られ、共同体的な規制は無効化され、彼らの地位と権力は、彼ら個人の恣意のままになるものに変質するのである。一方他の成員にとっては自己の精神は何の価値もなく、ただ、どこか手の届かぬ遠い所から降りて来る〈聖なる〉言葉＝意味を実現する為の手段として、彼の行為＝身体が要求される事になる。彼の生きられる世界から、自分の行為を秩序づける窮極的意味が奪われるのである。このような事態は、他者身体の我有化・自己身体の他有化として論じた事態に相当する。

第四のモデルにおいては、各成員はそれぞれが属する職業的・身分的な生活世界に生きる。こうした固有の知識・技術に基く分業が一般化すると、成員の生きられる世界には次のような事態が生じるであろう。第一に、彼は自己が所属する生活世界には属さぬ、異質な諸力に日常生活を依存せねばならない。彼が行なっているのは、特殊な職業的労働にすぎず、彼の日常生活の大部分は他者に依存せざるをえない。故に彼は、異なる生活世界に属する人々とも交換を含む日常的な相互行為を行なわねばならない。この事は、彼に自らが所属しない生活世界にも関与することを要求する。第二に、上から必然的に導かれることとして、こうした分業と交換系は、彼に同職組合的な生活世界における顔とは別に、もう一つの市民としての顔を持つことを要請する。彼の生きられる世界はこの両者に分裂する。第三に、こうした分業と交換系が成立する基盤としての都市が生む条件として、ヨソ者との接触の機会の増大が考えられる。都市は常にヨソ者を流入させ、異質な生活世界との出会いをもたらすのである。

こうした事態は、彼の所属する集団の生活世界と、彼個人の生きられる世界との間に何がしかのズレを生じさせる。このズレは、各成員に、個的な存在としての自我を自覚させはじめるであろう。複数の生活世界への関与は、独自の観点としての自分を自覚させ、アイデンティティの確立を求めさせる。これは個人の自由という観念を急速に育成するだろう。だが、同時にそれは他者への不信が増大することを意味する。なぜなら自己が独自の観点であるとともに他者も又独自の観点だからである。生活世界の分化は、情報をコントロールすることを通じて、各人に自己の秘密を持つことを可能にさせる。各人は他者に見られる顔の裏に、匿された顔を持つことが出来るようになる。こ

の別な顔こそが、何者にも屈せぬ独自の自己として、個人の自由という観念の実質的支えになるのである。だが同時にそれは、他者も又自分から匿された顔を持つようになることを意味する。匿された他者の顔に過度に凝集した関心は他者への病的不信を生むだろう。自己と他者をこのように観念化した時、他者の真の想いはわかり得ないのだということを予期的に前提とするようなコミュニケーションが成立するのである（注13）。

生活世界の分化とそれに伴う他者不信の昂進は、常識という形で分け持たれていた社会規範の存立を危くする。他者の行為の不確定性が意識され、それに対処する為に何らかの安定性のある行動予期（注14）が必要となる。だが、伝統は、生活世界分化によって相対化されてしまい、権威のよりどころではありえない。これに替わるものとして、成員の常識から相対的に自律した成文的な社会規範＝法がその重要性を高める。

それに関連して次の事が付け加えられる必要があろう。生活世界の分化・多元化は、共同社会全体をおおっていた窮極意味の相対的な重要性低下を導く。個人の生きられる世界においても、窮極意味によって統合される範囲が次第に低下し、圧倒的部分が世俗化されてしまう。これは各成員の生きられる世界の分裂・非統合を持たらす。ここに、意味を求める衝動が生じ、これからも超越的な世界観が要請されるのである。

こうした生きられる世界における疎外は以下のようになろう。第一に成員は相互に他者をコントロールしようとして、自己分裂を深める。他者の眼に触れる行為や身体は、真の自分ではない、真の自分は何者にも犯されぬ精神の内にあるとして積極的に自己分裂を押し進めていくのである（注15）。第二に成員は、他者不信から、行為の意味、規範、目的を次第に超越的な疎遠なものに求めていく傾向を持つ。独立的な諸個人間を媒介するものは、法・貨幣・合理性となる。いうまでもなく、これは、自己の身体を疎遠なものに明け渡していくことを意味する。

第五のモデルにおいては、並列し対立していた複数の生活世界は、それぞれの内部で分裂し崩壊の兆を見せる。第四のモデルにおいては、他者一般への不信がつのればつのる程、かえって各生活世界は凝集しようとする傾向があった。それを可能にしていたのは、各同職集団に分け持たれた共通の知識・技術と、それに関連する諸権利の存在である。だがこれらの知識・技術が客観化され誰にでもその行使が可能になると、その技能の重要性が低下してしまう。これは、生産手段を所有する者には、他者の労働の利用の範囲の拡大（＝すなわち低廉化）を意味する。彼は他者の労働力を大量に用い生産性を上げ利益を得ようとする。彼は、彼自身この過程で具体的な労働行為から引き離されているのだがそれに気づかない。一方労働者は、労働過程の自己決定力、自己身体の自己統御力を喪い、与えられた目的・意味・価値によって支配される事になる。すなわち彼は労働している一定時間、自分自身であることをやめるのである。以上の事は、生活共同体としての同職集団を崩壊させ、一方に他者の労働力を利用し利益を上げる者と、他方に生活の保障を喪った自由労働者を生む。そしてそれぞれの生活世界は、業種・職種を越えた類似性を持つようになる。

このような分業の中で疎外は、第一に、意味・知識・価値が客観化し各人を超越したものに変化する事によって、第二に、そうした意味・知識・価値によって労働行為を規制され、自己身体の統御力を喪う事によって現出する。第一の事態は、他者の労働力を利用する者にも生じている。彼は、

自己の命令でもって他者に労働を行なわせ得るが、それは彼の個人的な意志や恣意によるのではなく、それを超越した客観的なメカニズムによるのである。第二の事態は、正に、受動的な疎外的経験を生む。第四のモデルにおいては、疎外は各成員の何らかの自発的積極的な志向によって深化された。だが、この事態はそうした面すら含まないのである。

もし自己も他者もこうした分業の中にはめこまれているならば、自己身体が何者かに操作されているという意識と、他者の身体も又、何者かに操られているという意識を生むだろう。他者の身体は、他者が何かを匿しているから他者の真の意図を理解する上での助けにならないだけではない。他者が自分の意図を匿そうとしているか否かにかかわらず、他者の身体は、私の身体と同じく、単にどこかから来た言葉・命令を実現しているにすぎない。他者の身体は、他者の意図とは無関係なのだ。誰もが皆、彼自身の意志ではなく何かに操られているのだ（注16）。身体は単にその道具にすぎない。

第六のモデルでは、労働過程は分断され各成員はそのごく一部を担うにすぎなくなる。行為とは、何らかのまとまりを必要とする。ところが、労働過程の分断・細分化はこのまとまりを破壊し、労働を単なる身体の機械的動きにしてしまう。各労働主体から見れば作業時間内の身体の動きは何の意味もない身体の反復運動にすぎない。人間の活動における自然なリズムは喪われ、無理やり機械的なテンポに従わされるのである。

労働が細分化され、個人が大組織の中のごく一部を担うにすぎなくなるにつれて、労働する者は、自分の労働の結果への見通しを喪って行く。自分の生産した物が一体どこへ行き何になるのか知る事は非常に困難になる。なぜならそれは彼の身近に関与しうる生活世界の範囲をはるかに越えてしまうからである。

分業における労働過程の細分化は、各成員間の直接的協力を必要としなくなる。各成員は単純な労働行為を反復するにすぎず、その行為は非常に特殊化されているので、労働者相互でも共通の生活世界に生きているのだという実感はなくなる。各労働者は、労働を手がかりに相互に啓発しあいその経験の深化・般化を通じて社会生活における自己訓練を行うことは不可能になる。その時、労働の場は単なる職場世界として各人に意識される。

一方、この職場世界に比較して、小家族内等における私生活が各人の意識の中で肥大化する。労働が強制的な身体反復でしかないなら、一体賃金の為以外に誰がそんなことを行い得ようか。労働の後の「自由時間」の為以外にどうして行い得ようか。私生活は各人の残された唯一の砦として、各人の意味の根拠として、意識の内で肥大化するのである。

各個人の私生活への引きこもりと断片的労働行為は、社会全体が合理的に組織化されて行くのに反して、彼の生きられる世界の分裂・非統合を深め強めて行く。彼は従属的ないくつかの集団を通りすぎつつ、どこでも全体的な見通しを得られずに生きることになる。それは責任ある判断能力を個人から奪い、彼の自分自身への信頼を不可能にし、不安に陥し入れるであろう。自己自身への信頼の欠如は、逆に彼の世界への信頼を不可能にし、彼は自ら過ぎゆく者としてしか世界に関与できなくなる。この時、生きられる世界が切れ切れの断片に化してしまうのをくい止めようとして、人人は意味を求める。有意味性への衝動が表面化し、疎外が経験における事実として自覚されるに到る。

第七のモデルにおいては、こうして自覚された有意味性への衝動に対応して、意味そのものが消費の対象＝商品として大量に供給されるに到る。意味は生産され、マスコミを媒介として大量に伝達＝消費される。人々は、個性を買い、生きがいを求めてマスコミに群がる。マスコミは各成員にとって依拠すべき一次的リアリティとなり、具体的な集団が形成する生活世界をも従属化させる。

各成員は、主に私生活と職場という二つの生活世界を日々移動するが、それらはおのおの大組織に従属・依存しており自律的な秩序を失ってしまっている。私生活は、大量生産・販売される物資にその存立基盤を依存しており、生活様式はほぼ画一化される。だが人々はだからこそ、個性を求めることになる。その需要にあわせて、私的な生きがい・意味・楽しみ・余暇そのものが産業の対象になり、個性的なライフスタイルそのものが商品化される。結果として各人は、私生活においても〇〇評論家や〇〇コンサルタントの言表を信奉し、商品を選択し規格化されたライフスタイルを取り入れることを期待され誘導されるのである。

従って私的世界もこれら商品やマスコミの言表に充ちあふれることになる。ここに、自分の身辺で起きた出来事でさえ、新聞に出てはじめてそのリアリティを確認するといった感性が生じる。そこでは、他者はその具体的交流を通じて存在を確かめるものではなくなり、まずあらかじめマスコミによって与えられるイメージによって分類されてしまう。直接的な他者との交流が減少し擬似生活世界によってワンクッションおいた他者との関係が一般化する。各成員の生きられる世界の中でもっとも確かなリアリティとされるのが商品とマスコミであり、それによって各成員が具体的に参加している生活世界が逆に判断されるに到る。

実際、こうした他者との関係の有り方は日々生きていくのに不可欠のものともなりつつある。なぜなら人々は大量の人間と接触して行かねばならないからである。日々出会う多くの人々のほとんどと個人はごく少ない関係しか持ち得ない。都市生活における相互の無関心さは、多くの人々と接触せねばならぬ各人の防衛的な戦略である。多くの人々との浅い関係を保つ為には共感は抑圧されねばならない。レッテルによる処理はこうした事態に適合的なのである。

一方職場において各人はますます大規模な組織に組み入れられている。生産に次第に高度の科学技術知識が導入されることによって各成員はそれら諸知識を全体的に身につける可能性が低下する。その結果多くの個人はおのれの為す身体活動が何を為しているのか、その結果を充分予見しえぬ事態が増大する。自分の行為の結果が公害を出したり薬害をもたらしたりするかもしれないということを否定し得なくなる。自分は一体何を為しているのか、それは正しいことなのかということへの充分な答えがないままに誰もが身体と頭脳をその場限りの必要にせまられて動かし続ける。これが精神と身体の分裂の新しい局面として現出する。

こうした各人の予見・判断不能性が高まるにもかかわらず、正当性の根拠の民主化は各成員に強制的に合意を要求してくる。各世論調査、選挙、マーケット・リサーチ、住民説明会等々。その時参加という語は、空白の委任状を出すにも等しく、行政側の単なる正当性獲得の手段と化す可能性がある。

こうした社会的世界を各成員は、擬似的生活世界にリアリティを託しながら生きていく。だが、それは逆に、彼の意味と行為、精神と身体の分裂を強めてしまう。彼が具体的に関与する他者・集

団・事物、彼が実際身体を動かして為す労働は、彼にとって意味がなくなってしまうからである。この時、アイデンティティへの問いが全面化する。私とは誰かという問いが、社会意識として噴出するのである。

4　結語－現代社会と疎外

最後に、本稿の問題意識、問題設定、枠組を再度明らかにしまとめておくことにしよう。本稿は、現代社会における疎外を人々の経験のあり方の変質として把握するという問題意識から書かれた。疎外は単なる制度上の所有権の問題でもイデオロギーとしての近代合理主義の問題でもない。それは我々が日々生き経験している事実なのであり、経験の貧困化の問題なのである。故にその止揚は、最終的には我々の生きられる世界の転換として、経験の質の変革としてなされねばならない。

であるならば、我々の生を規定している何らかの質、すなわち自分自身にまとわりついた経験の特有の歪みこそが問題とされねばならない。すなわち、我々の生きられる世界こそが問われねばならない。

本稿ではこのような問題意識から、生きられる世界の変化を社会変動との関連で構成し直してみるという問題設定がなされた。その枠組として(a)分業化(b)生活世界の分化(c)生きられる世界の分裂という三つの事態の同時的進行という考えを提出した。さらにその概略的様相を示す為に七社会類型を構成した。既に気づかれたであろうが、七類型は、一～三が前近代、四は近代前期、五六は近代後期から現代、七はまさに現在の社会を想定して構成した。だが、生きられる世界の記述に力点をおいた為に、記述がごく粗く一面的になった事は否定できない。又本稿では、各類型間の変動のモメントや論理はほとんど扱っていない。

先に述べた問題設定に十分答える為には、生きられる世界の構造とは何か、その変化とは何かという問いに理論的に答える準備をし、本稿のモデルを再検討してみる必要があるだろう。そうした必要な作業から見れば、本稿はその第一次近似、ごく粗いスケッチにすぎない。

［注］

1. 成員とは、特定共同社会の memberである個人を示す概念である。
2. 筆者の1978年の論文ではこの両概念は同義として用いられていたが、本稿では論義の正確さを期す為に両概念を区別した。ただし両概念とも意味的世界を指しており、一方が客観的、他方が主観的といった含意は全くない。
3. 行動の態勢化とは、特定の行動指向によって身体の状態がそれに見あった状態になることを言う。
4. ある種の専門的分業、例えば宗教家や法律家等々は、(c)の意味に関する分業も含み込んでいるが、一般的には(b)、(c)両者は区別しえよう。又、(b)、(c)は、それも大きく見れば生活過程を特殊化するという意味で(d)の分業形態と区別しがたい点が生じようが、ここでは(d)はより特殊な意味で、すなわちすでに確立した知識・技術領域内における労働過程の細分化を指すことにし、(b)(c)と概念を弁別する。
5. 本稿における自然的分業という概念には、それが人間にとって変更不能な本性であるといった

主張は全くない。むしろこれは特定の社会条件による特殊な分業モデルである。

6. このモデルは、Schutz が知識の社会的布置のモデルとして提出したものに多くの示唆を得ている。(Schutz & Luckmann 〔1974:308f〕)

7. この都市の把握は山岸健に多くを得ている。(山岸〔1978〕)

8. これは基本的には所有論として論じるべきことであるが本論の域を越えるので本稿では論じない。

9. 第五のモデルと第六のモデルにおける労働の変質に関する記述の多くは中岡哲郎に負っている。(中岡〔1970〕)

10. 擬似的生活世界とは、本稿では、各成員が直接参加している生活世界ではないという意味で用いている。

11. Berger は、社会的世界が人間にとって疎遠なものに変質するこのような事態を疎外と定義している。(Berger〔1967〕)

12. Morin はこれを死と関連づけて論じている。(Morin〔1951〕)

13. Goffman の諸著作は、各成員にこのような分裂が生じた以後の世界における、リアリティとアイデンティティのコントロールの諸戦略と諸戦術を扱っているといえよう。

14. Luhmann の法社会学は、こうした観点から法の形成を論じている。(Luhmann〔1972〕)

15. Laing は、他のまなざしと精神と身体の分裂の関連を、分裂病という極限的事態における経験において見事に分析している。(Laing〔1960〕)

16. 分裂病患者がこのような妄想を抱くことが多いということは良く知られているが、第五のモデルのような社会ではこれは単に妄想とは言い切れず、社会のある側面を適切に把握しているといえるだろう。

〔 文　献 〕

Berger,Peter L.1967 The Sacred Canopy : Elements of a Sociogical Theory of Religion,U.S.A.;1969 The Social Reality of Religion(retitled);1973 Penguin University Books.

Berger,Peter L.& Luckmann,Thomas 1966 The Social Construction of Reality : A Treatise in the Sociology of Knowledge,Doubleday & Co. Inc.; = 1977 山口節夫訳,『日常世界の構成ーアイデンティティと社会の弁証法ー』,新曜社。

江　原　由美子　1977「リアリティとアイデンティティーコミュニケーションの視角からー」,『ソシオロゴス』1 : 39-49 .

―――――　1978「生きられる世界の理論化をめざして」,『ソシオロゴス』2:34-43 .

Goffman,Erving 1959 The Presentation of Self in Everyday Life, Doubleday & Co.Inc.; = 1974 石黒毅訳,『行為と演戯〜日常生活における自己呈示〜』,誠信書房。

市川　浩　1975　『精神としての身体』，勁草書房。

Laing, R.D.　1960　The Divided Self : An Existential Study in Sanity and Madness, Tavistock Publications Ltd.; = 1971 阪本健二・志貴春彦・笠原嘉訳，『ひき裂かれた自己〜分裂病と分裂病質の実存的研究〜』，みすず書房。

Luhmann, N.　1972　Rechtssoziologie, Rowohlt Taschenbuch Verlag, = 1977 村上淳一・六本佳平訳，『法社会学』，岩波書店。

中岡哲郎　1970　『人間と労働の未来』，（中公新書），中央公論社。

真木悠介　1977　『現代社会の存立構造』，筑摩書房。

Morin, Edgar　1951　L'homme et la mort, Buchet et Chastel; 1970 (novelle édition revue et complétée) Editions du Seuil; = 1973 古田幸男訳，『人間と死』，法政大学出版局。

Schutz, Alfred & Luckmann, Thomas 1974 The Structure of the Life-world, Heinemann.

山岸　健　1978　『日常生活の社会学』，NHKブックス。

湯浅泰雄　1977　『身体ー東洋的心身論の試み』（叢書身体の思想4），創文社。

（えはら　ゆみこ）

女性の社会問題研究報告集

第1集（非売品・カンパ200円）女性研この一年をふりかえって・大内田鶴子　家事労働論・船橋恵子　女と労働をめぐる若干の考察・粒良志保美　伝統と近代・大塚仁子，湧井由美子

1977・4月残部僅少〔青焼きコピー版〕

第2集 300円 性別のありか・橋爪大三郎　東南アジアからの視点・江原由美子　The Active Housewife・今村あん　悦子さんへ・安江麻里　インドで出会った女たち・大塚仁子

1978・6月〔手書き軽オフセット印刷〕

第3集 予価300円 万葉の世界の男と女の関係性・大塚仁子　性のトポロジーへ・内田隆三　生命科学と女性の権利・橋爪大三郎ほか

1979・6月刊行予定〔手書き軽オフセット印刷〕

女性の社会問題要因連関図 50円 KJ法による図解　1977・8月〔青焼きコピー版〕

*　*　*

女性の社会問題研究会（略称，女性研）は，女性の社会問題の社会（科）学的検討をめざして活動しています。会員は7,8名，準会員が若干名おり，月一回例会を開いています。これまでの研究成果は，上記刊行物にまとめられています。御利用ください。　世話人：長谷川公一（Tel950-1355）